



若手研究者の研究活動（アクティビティ）の推進に向けた取り組み：看護学部学術委員会学外学術交流推進小委員会2024年度講演会開催報告：学内活動

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福島県立医科大学看護学部 公開日: 2025-04-14 キーワード: 作成者: 佐藤, 富美子, 立柳, 聡, 林, 紋美, 馬場, 香織 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2002359">https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2002359</a>

## 学 内 活 動

### 看護学部学術委員会学外学術交流推進小委員会 2024年度 講演会開催報告 若手研究者の研究活動(アクティビティ)の推進に向けた取り組み

看護学部学術委員会

学外学術交流推進小委員会：佐藤富美子，立柳 聡，林 紋美，馬場 香織

看護学部学術委員会学外学術交流推進小委員会は、今年度活動目標である「学外の研究者との交流を図り、研究取り組みを促進する」ために、学外の若手教育研究者を講師として招聘し、教育・研究・社会貢献を連動させるための研究活動、および若手研究者の研究マインドや研究力を育成するための組織的支援について考える講演会を31名（本看護学部教員30名，博士前期課程学生1名）の参加を得て開催した。その概要と実際について報告する。

#### 1. 講演会の概要

**テーマ：**若手研究者の研究活動（アクティビティ）の推進に向けた取り組み

**企画の意図：**本看護学部は2018年に開設20年を振り返り、看護学部のさらなる飛躍を遂げるために全教員企画による「看護学部 VISION2018策定に向けて」を創り上げ、その課題の一つとして研究を通じた社会貢献や教育力の質の向上を掲げている。本看護学部に限らず、看護系大学教員が日々の教育実践や学務に時間が割かれるなかで研究のアクティビティが高いとは言えない状況が続いている<sup>1)</sup>。アメリカにおけるシニア世代の看護研究者の共通認識は「若手研究者を育て、次世代をつくることは研究者の当然の務めであること」と紹介されている<sup>2)</sup>。わが国でも日本学術振興会<sup>3)</sup>、文部科学省<sup>4)</sup>、日本看護科学学会<sup>5)</sup>をはじめとする学術会議において若手研究者育成について言及している。若手研究者の育成が議論されている現代において、学外の若手研究者を招聘し、議論することは、本看護学部が若手研究者を組織的にどのように支援していくか、また、若手研究者が今後どのように研究キャリアを積み重ねていくかを考える機会となり、研究を推進する人材の能力育成に貢献すると考えた。

**参加者・日程・場所：**看護学部教員，大学院生

2024年12月23日(月) 14:00~16:00

8号館 N301

#### 講演会

##### 第1部 講演

自治医科大学看護学部成人看護学 教授

長谷川直人 先生

山形県立保健医療大学看護学科老年看護学 教授

青山 真帆 先生

東京科学大学大学院保健衛生学研究科在宅・緩和ケア

看護学分野 講師

菅野 雄介 先生

##### 第2部

本学若手研究者（学術委員会委員 林紋美，馬場香織，鈴木妙子，杉本幸子）と講演演者との研究活動推進に向けた活動に関する交流ディスカッション

## 2. 講演会の実際

### 1) 第1部 講演の主な内容

旺盛に研究に励み、着実に成果を積み上げている学外の若手研究者3名から、順次、本企画テーマに基づく講演が行われた。

#### 1) 長谷川直人先生

患者教育、コンコーダンスなど、自身の関心を紹介した後、キャリア形成の各段階において、どのような課題に直面したか、また、それを克服していく過程でどのような悟りを得たか、順次解説された。

特に大学院修士課程在学時代から助教の時代にかけての経験が重要であったとみられ、この時期のことを中心に話された。「リサーチクエスチョンがわからないことや、看護実践経験を伝えることの難しさ」に直面し、乗り越えるための試行錯誤から得られた三つの教訓を特に強調された。一つは「臨床上の課題の要約と立言化」であり、これが課題の明確化につながる。二つ目は「理論や概念を活用した経験の分析」であり、すなわち、既存の理論や概念との対比を通じた自己の経験の言語化である。三つ目は「構造的、戦略的な文献の検討」で

あり、特に、文献を検討する際に、その項目構成を、フィッシュボーン（特定要因図）を活用して捉えることとした。

続いて、自立・自律した研究者を目指す上での心得を語られたが、特に強調された点の一つは、「心酔できる理論や概念と出会うこと」であり、それを踏まえ、看護者の患者に対する教育的な係わりをモデル化することと、コンコダンス＝患者の価値観やライフスタイルと医療の在り方との調和を図ること。二つ目は「知的生産作業は専念できるまとまった時間と落ち着いた作業ができる場所が必要」であること。三つ目は研究と教育などの他のエフォートとの一石二鳥を目指し、効率的に時間と労力を活用すること。四つ目は、研究の得意分野を一段と伸ばし、業績を豊かにして自己をPRすることとした。

そして、最後に「研究活動を常態化するための組織づくり」の重要性について言及されたが、「学科（分野）内のメンバーで、各自の研究に関する自己紹介を年間計画として企画すること」により、メンバー間で相互理解を図り、研究上のニーズの共有と創出を促進して、「やらされる研究からの脱却とやりたい研究の創出を進める」ことが重要との提言がなされた。

## 2) 青山真帆先生

学部卒業時は助産師希望であったことや東北大学でリンパ浮腫外来に携わったことなどの経歴と、研究テーマとして、「遺族ケア、遺族のメンタルヘルス」、「緩和ケア」、「がん患者、高齢者の健康格差」などに関心を寄せていること、博士後期課程以降に「グリーフに関する研究」が拡大したこと、主たる研究業績である「End of lifeにある／迎える患者や家族のケア・サポート」をまとめながら、誰もが安心して過ごせる看護の創造へと、研究が収斂されるようになったことなどを紹介された後、本企画のテーマに係わって、以下のように話された。

研究のモチベーションを高める上で、「多職種・多施設の専門家との交流」が極めて重要であること、研究に対する刺激と気づきの源流がどこにあるかについて示唆された。また、原著論文を増やす上で、環境、すなわち、所属している組織のあり方が重要なファクターとなること、自分の研究活動に対する理解と支援が得られる環境であるかどうかが決めてとなることを強調された。悩みの種である研究と他のエフォートとのバランスをとるための心得としては、理想よりも、優れて現実的なエフォートの管理に徹することの重要性を指摘された。さらに教育と研究との関わりをめぐって、「学生と共に自身の研究プロジェクトに取り組む」ことの意義を強調された。研究に対する関心も高めつつ学生を育て、かつま

た自分の研究も着実に進めていく効果を示された。最後に社会貢献と研究との関連について、「社会貢献活動から気づきを得て、研究活動も拡充される」として、特に、実習病棟との協力の重要性とその積極的な推進を提言された。

## 3) 菅野雄介先生

本大学看護学部出身の研究者として、学生時代のエピソードなどを多々織り交ぜ、ここまでの研究者としての歩みを懐かしく振り返りながら話された。学部3年生後期の実習の中で研究者としての芽生えがあったこと、弁論大会で視野と人的なネットワークが広がったことが研究の世界に踏み出すうえで大きな背景となったことを紹介された後、臨床の時代、そして、大学院への進学に至ってからの悟りや思いを語られた。

本企画のテーマと係わって、特に強調された点は、「研究のおもしろさと厳しさを知ること」の重要さである。臨床で捉えた疑問を解消するために研究へ、やがてそこから研究上の疑問が生まれ、一段と研究は深化するが、やがてどこかでつまずきも経験することになる。しかし、そこを克服する努力の積み上げの中で鍛えられる。正に己に厳しさを課す提言であろう。二つ目に、研究者の社会貢献として、「研究成果を臨床の場に還元する」ことを忘れてはならず、医療政策に関する理解が重要であることを指摘された。三つ目には、研究を進化させるために、「時代の変化に伴って、新たな挑戦を図ること」の大切さも指摘された。時代や世の中が変われば、研究すべき課題も変わってくることは自然であり、それに対応できる研究者であるための心得と言えよう。四つ目に、「柔軟性と仕掛け」と表現されたが、新たな研究を生み出すきっかけとして「異分野とのコラボレーション」、すなわち、「掛け算」の重要性に言及された。五つ目に、研究と臨床実践を進化・深化させていくために不可欠な要件として、「すばらしい人との出会い」を挙げられた。よき理解者であり、支援者、そして、自分を育ててくれる人々の存在があって、豊かに成長できることを示唆した。最後に研究、臨床、個人の生活など、どのようにバランスよくこなしていくか、「エフォート管理の難しさ」と、その中でいかに研究のエフォートを多々確保するか、意識的な工夫が重要であると指摘された。

## 4) 講演内容の総括

3名の先生方の講演から、よい研究を実現、拡充する上で重要になる点について複数の共通項を抽出することができる。

一つは、「研究を行う組織、もしくは環境の重要性」である。研究に専念できる施設と時間があること、「自

分の研究に対する良き理解者、支援者、助け合える仲間が周りにいること、総じて自分を育ててくれる人との出会い」が決め手の一つと言えよう。

二つ目に、「多職種、多施設、異分野との交流と共同の重要性」である。新たな研究を生み出す従来の研究を進化・深化させる発見、気づき、創造のきっかけがそこにあり、学生であれ、研究者であれ、所属組織の垣根を越えて、積極的に外に出ることの大切さが示された。

三つ目として、「エフォート管理の工夫の大切さ」である。研究に専念できる時間と場をより多くどのように確保するか、教育との相乗効果を生み出すなどの方法を考慮すること、さらには、エフォートが限られるのであれば、それを使って、「独自性（稀少価値）のある研究」を実現し、少ないながらも輝きのある業績を生み出すことの重要性が指摘されたと思われる。

## 2) 第2部 講師の先生方と本学若手研究者の代表4名との主なディスカッション内容

第2部のディスカッションは、第1部の講師の先生方による研究、教育、社会貢献のバランスをとる難しさ、思うように研究活動が進まないジレンマも抱えながら日々活動されているなどの率直な思いや経験の語りを受けて、本学の若手教育研究者である教員が質問し、講師に回答を求める形で進行した。その主なディスカッションの内容について以下に示す。

### 質問1【林紋美】

研究の継続にはモチベーションの維持が必要と実感している。モチベーション維持のため、具体的に実施していることは何か

#### 【長谷川先生】

博士後期課程を修了後、研究マインドが明確になったことを機に、自分の大事にしたいことや研究目的が明確になり、実行していきたいという思いを持つようになった。研究は一人で出来ないからこそ、他の教員や周囲の仲間と研究マインドの共有が必須と考える。他者との話し合いの中で自分が大事にしたいことや研究者としてできることが明確になり、他者の思いも聞き取れるようになってきたことが、モチベーションに繋がった。この経験を通し、モチベーションの維持には、自分の興味や関心を他者に伝えていくことが必要と考える。また、科研費を獲得するなどし、必然的に研究すべき状況や、共に研究する仲間作りも含め、環境を整えることも必要である。

#### 【青山先生】

研究は大学教員としての仕事で、看護基礎教育課程が大学化された意味や目的は看護を発展させるためである

と認識し、研究に取り組んできた。論文を書くことはモチベーションに左右されるが、研究活動はモチベーションではなく、教員としてのミッションであるという認識でいる。

#### 【菅野先生】

モチベーションには、外的要因と内的要因があると考えている。現職では、外的要因が強く、研究業績が給与に結びつく現実があるため、論文を執筆していかなくてはいけない必死さを持ち行っている。一方、臨床に還元できる研究となってくれば、自ずとモチベーションは上がってくると実感している。

#### 【林紋美】

研究活動の推進に向けては、多少の大変さや苦労は覚悟しなくてはならないことや、仲間作りが大切であることを改めて意識することができた。

### 質問2【杉本幸子】

博士後期課程を選択する際のポイントは何か

#### 【長谷川先生】

博士後期課程の指導教授は、助教時代に勤務していた大学の他領域の教授であったが、自分を研究者として育ててくれようとしてされていること、また、概念や理論を丁寧に捉えようとしてされている先生で臨床課題の新たな捉え方を学べると感じたことを理由にお願いした。博士に行きたい時と感じた時が行き時で、自分が博士課程でどう学びたいかが大事だと考える。

#### 【青山先生】

修士から博士に進学するにあたり、色々と悩んだ末、修士と同じ指導教授を選択した。しかし、博士課程2年目の時に、自分の興味関心が現在の領域とは異なるように感じ始め、領域を変更した経緯がある。

#### 【菅野先生】

修士では研究が思うようになかった経験があり、博士ではリベンジをする思いが強く、修士と同じ教授に指導を受けた。

#### 【杉本幸子】

博士を選択するにも様々な考え方があること、人との出会いが重要と感じ、外に出て様々な人と交流を持っていくこと必要であると感じた。

### 質問3【鈴木妙子】

研究、仕事のエフォート配分や優先順位のつけ方について

#### 【青山先生】

エフォート管理はとても難しいと感じている。ただ、時代は変わり、仕事だけに没頭するのではなく、ワークライフバランスも含め考える必要があると思っている。

看護教員が看護研究をしたいとなった時、毎日遅くまで仕事をするのを強いるのは、今の時代には合っていないと考えている。実習や授業もある中で研究するのであれば、組織全体で変えていく必要があると思う。アメリカやイギリスの看護教員は、授業も実習も研究も同時にやっていくことは困難なものと捉えている。これらの国では、教育寄りの人、研究寄りの教員がいて、自分がどうありたいかを選択できる状況にある。そのため、教員が長時間実習病棟に張りついているのではなく、臨床の指導者に実習指導を任せるなどの指導体制を、今後考えていくことが必要だと感じている。私自身もエフォートについては悩んでいる。

#### 【菅野先生】

プロジェクト研究は実施しなくてはいけないが、自身の研究の場合、何かしらプレッシャーがないと研究をやらないものとも考える。現在の自分の研究は、プロジェクトが大半で、自分の研究はできる状況ではなく、それが今の悩みではあるが、大学院生と一緒に一生懸命、分析し、期日まで修正を求められる状況で頑張っている。このような状況の中、教育のエフォートもあり、多少、無理してやっていると感じることもある。しかし、そうでもしないとやれない状況であるが、自分が頑張れたら、何かしら成果物が出てくる。それが、後々、プラスになるかなと思っている。

#### 【長谷川先生】

現職の大学は、組織の方針として学生を丁寧で育てること、看護職として自立した臨床家の育成を目指しているため、教育のエフォートを重視している。そのため、研究活動を促進させるような組織の外的な圧力は少なく、研究はできたら実施するという状況にある。二人の講師の先生方と比較すると研究者としてのキャリアはまだだと思いが、自分は組織から教育力の評価がかなり大きいと感じている。この大学の環境で研究するにあたって注力しているのは、本学や自分の経験でなければできない研究は何かという点である。研究のパーセンテージを増やすより、自分自身や自分の講座が関わっているからこそ出せるものは何か、独自性を意識しながら研究を行っている。

#### 【鈴木妙子】

先生方の話から、自分の周囲や10年先を見据えてエフォートを考えていこうと思った。

#### 質問4 【馬場香織】

若手研究者が研究活動を促進させる組織作りについて

#### 【長谷川先生】

若い時はチームを意識していなかったが、チーム医療論の講義を担当するにあたり、チームでの一人一人の役

割意識は大事だと思った。初めて教員になった時、教授がプロジェクトの研究を持ってきた。その際、教授から、「あなたは、修士時代に量的な研究をしてきて、地域のデータベースの作成の経験や、量的な視点が活かされると私は考える。生活習慣病予防の視点で考えてもらいたいから参加してほしい」と声をかけられた。当時は、その教授の言葉をあまり意識していなかったが、改めて自分が成長してみると、研究者としての自分の強みを説明することを伝えながら、協力をしてもらうような声かけができる教授は少ないのではないかと思った。この経験から、自分が回りの先生に声をかける時は、相手の研究者としての強みを説明し、参加してほしい意図を相手に伝えられることが大切だと改めて思っている。これからもこのことを大事にしていきたい。

#### 【青山先生】

プロジェクト研究や学会に参加し、他の研究者に自分はこういう研究がしたいと話し、自己アピールしていた。結果、自分を認知してもらえ、何かあったときに声をかけてもらえるようになっていった。学会での機会を大切に、学会の講演会や関心がある領域で積極的に繋がる行動が大事だと考える。また、院生や学部生と一緒に取り組める研究があると、研究が広がり、チームプロジェクトとして進めることが可能になっていく。専門領域を超えて、横にも研究を繋げていけるのが理想である。

#### 【菅野先生】

大学院生の時にプロジェクトを任せられ、かなりのプレッシャーと共に、責任をもってどう研究を回していくかという経験をした。そこでは、チームビルディングとして、どうすべきかが課されていた。特に教室運営では、院生や卒研生も含め共にボトムアップしていくためには、細かな気配りをもって共通のビジョンに向かってそこに到達させることが必要と考えている。また、組織運営では学生、教員が共に興味関心について自由に話せる、何を話しても否定されない雰囲気をもつようにし、チームワークが大切である。研究は一人でやるのではないので、仲間を大事にしながらか進めていきたい。

#### 【馬場香織】

仲間を大事にしながらか研究を進めていくことの大切さを実感した。

最後に参加者から、「研究は大変であるからこそ、パッションが必要だと思っている。先生方が持っているパッションについて教えてほしい」という質問があった。

#### 【青山先生】

入学した大学では、1期生であったこともあり、当時から反骨精神があった。保健医療を勉強したいと考え入

学したが、看護学の将来はこれでよいのか、看護学はもっと発展できるのでは、発展しなくてはいけないのではないかと、思っていた。具体的にこの領域の研究をやりたいということではなく、どちらかというところ、この研究を通して、看護学を発展させていきたいという強い思いは当時からあった。当初は、やらされた感じがあったが、10年その研究のテーマで実施してきたことで、よくわかってきたこともあるし、自分がやりたい研究テーマになっているのは間違いないと思っている。

#### 【菅野先生】

自分が研究者として、こだわっていることは、研究がなされるとは何かしら課題があり、それらを解決しなくてはならないことがあるということである。それらが、専門性のあるテーマというよりは、様々なプロジェクトごとに、自分が大事にしたいものを持ちながら、研究させてもらっているところがある。

#### 【長谷川先生】

医療は患者主体とされながらも、医師主体になっていることの強い疑問があった。医療を患者主体にするための研究の在り方はどうすればよいかという思いを持ち、博士に進んだ経緯がある。

#### 最後に【林紋美】

研究者として、積極的に他者と交流を深め、自らの研究について語る場の重要性について学ぶことができた。また、研究活動の推進には、研究者としての歩みを振り返り、内省し、自分はどうありたいのかを考える時間を設けることが必要であると感じた。さらに、社会において看護を広く捉える視点も忘れてはいけないことだと実感することができた。

### 3. 講演会終了後のアンケート結果

講演会終了後から5日間、Google Formsを用いて無記名のアンケートを実施し、31名の参加者のうち16名(51.6%)の回答を得た。職位内訳は15名の回答があり、教授4名、准教授4名、講師4名、助教3名であった。

講演会の所要時間は、回答者全員が“適切であった”、“やや適切であった”と回答した。

「今回の講演会はあなたの研究活動にどの程度貢献できるのか」の問いには、15名が“貢献できる”もしくは“やや貢献できる”と回答し、1名が“貢献できない”であった。

自由記載には11件の回答があった。演者からエネルギーを感じ、大いに刺激を受けたという感想や、いかに研究と教育のバランスをとるか、具体的な活動内容、エフォートの考え方やその実際を知り、自らのエフォート

を振り返る機会となった、研究への向き合い方、取り組み方は様々であり、まずは、自分がどうしていきたいか、求められることは何か、エフォートをどう考えるかについて、じっくりと検討していくことからはじめようと思うなど、エフォートを再考する機会になったとの回答を得た。また、若手研究者の研究アクティビティは、日々の教育活動や教員との交流、ネットワークを通して、研究環境を自分で創り上げていくことが大事であることを実感できたなど、研究への向き合い方の学びについて回答があった。その他、第2部の演者と学術委員会委員の対談が素敵な会にしてくれた、一人一人の演者の話をもっと聞きたかった、質問できる時間をもっとほしかった、などの企画に関する自由記載があった。

### 4. おわりに

2024年度の学術委員会学外学術交流推進小委員会企画による講演会は、本看護学部教員、特に若手研究者の研究を通じた社会貢献や教育力の質の向上を推進するための個人および組織のあり方について考える機会にしたいと企画した。その企画は、3名の演者の講演および演者と本看護学部の若手研究者とのディスカッション内容、アンケート結果から、目標が達成できたと考える。

特に学外から招聘した若手研究者3名の語りからは、現在ある環境やこれまでの経験が異なるものの、大学教員として研究活動することの社会的使命を理解し、研究テーマを深めるための方略を自ら実践してきた誇りや力強さを感じとることができた。そこに至るまでの人やプロジェクトの出会いをきっかけとして、看護学研究者としてテーマにすべきことは何かについて深めていく過程と原動力は、聴く者にとって大いに刺激になったと思える。若手研究者の研究を推進するには、研究に対する良き理解者、支援者、助け合える仲間が周りにいること、総じて研究者を育ててくれる人との出会いが得られる環境を個人、組織が創り出していく重要性を改めて実感できる機会になったように思う。今後も学術委員会では本看護学部教員の研究力を推進するための支援となる企画が何かを課題にし、検討していきたい。

### 引用文献

- 1) 真田弘美：若手研究者育成のさらなる進展～海外大学の視察を中心に、看護研究, 50 (2), 101, 2017.
- 2) 真田弘美, 仲上豪二郎, 山本則子他：NIHによる若手研究者育成支援—NINRを中心に、看護研究, 50 (2), 107-113, 2017.

- 3) 日本学術振興会, <https://www.jsps.go.jp/j-programs/>, (2024/06/11閲覧).
- 4) 文部科学省 令和4事業年度の主なトピック《若手研究者の支援の充実について》, [https://www.mext.go.jp/content/20230706-mxt\\_gakjokik-000030881\\_12.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230706-mxt_gakjokik-000030881_12.pdf), (2024/06/11閲覧).
- 5) 日本看護科学学会 若手研究推進活動, [https://www.jans.or.jp/modules/committee/index.php?content\\_id=74](https://www.jans.or.jp/modules/committee/index.php?content_id=74), (2024/06/11閲覧).

